

書評

Kevin Twain Lowery

*Salvaging Wesley's Agenda: A New Paradigm for
Wesleyan Virtue Ethics*

(Princeton Theological Monograph Series 86, Pickwick
Publications, Eugene, Oregon, 2008), 328 pp.

久保光彦

本書はアメリカのオリヴェット・ナザレン大学准教授（哲学・神学）ケヴィン・トウェイン・ラウリーによって著されたものである。ラウリーは、現代においては「ウェスレーの綱領 (agenda)」が失われている、と書きはじめる。「ウェスレーの綱領」の核心にあるものは、ウェスレーの「完全論」であり、この「綱領」が現代において失われている、と彼は述べる。彼はこう書く。「完全の教理がウェスレーの神学的綱領の根幹にあるという点では、私はきよめ派の伝統と見解を共にする。しかしながら、私が教わったことに反して、ウェスレー自身の完全論に対する視点は、きよめ派のそれとは著しく異なるということが、私に明らかになった」(xiii)。彼はこうも述べている。「一世紀以上前に、大多数のメソジストは完全論をあきらめ、きよめ派の中のわずかな人間のみが、ウェスレーが教えたことを知るのみである。[中略] 伝統的なきよめ派の『聖化』に関する教えは、必要以上に単純化された神秘的な倫理的形成の型に基づいており、その教えを救済することは不可能であり、むしろまとめて破棄されるべきなのである」(xiii)。ここから伺えるように、ラウリーは現在のきよめ派の一般的なウェスレー解釈ならびにその聖化論などの教えに同調していない。むしろ、伝統的なきよめ派の聖化論や完全論へのアプローチに対して否定的な立場

に立っていると言える。さらには、本書を通して顕著であることだが、ラウリーは「完全な聖潔」に関して、「漸的聖化」の立場を取っており、「即時的聖化」よりは「漸的聖化」を神学的に優遇していることも申し添えておくべきだろう。

本書におけるラウリーの目的は「より認知的な手法に則った認識論に根ざした、ウェスレー主義美徳倫理のためのパラダイム（理論的枠組み）を形成することである」（*ibid*, xviii）。本書は三部から構成されている。第一部（一章と二章）では、「ウェスレー主義の美徳倫理を発展させる必要」という見出しの下、上で述べたようなことがもう一度論じられている。具体的には、現代におけるウェスレーの綱領の喪失並びに、それに伴う新たな思索的土台の必要である。先程も述べたことであるが、ラウリーは必要以上に単純化されてしまった「完全論」の解釈そしてその教えに対して批判的である。彼はこう述べる。「『完全』は大いなる目的（神の国、神との同一など）に至る手段として見られることがなくなり、完全の経験がその中における目的に成り下がってしまった。」（*ibid*, 16）そして、伝統的に、福音派の特徴として反知識主義が見いだされることも指摘している。ウェスレーの教理は時間の経過の中で、必要以上に推敲され、単純化されてしまった。当然、そうなると、ウェスレーの教理から発展する美徳倫理の思索にも単純化の波が及ぶ。このように必要以上に単純化されてしまったウェスレーの綱領を救済するために、ラウリーは新たな思索的理論的枠組みを提示するわけである。ウェスレーを論ずる際に知的主義／議論を避けて通ることはできない。それが一貫した彼の主張である。これを避けて通るときに、必要以上に単純化された教理が生成されてしまうのである。これらのことを踏まえた上でラウリーは、ウェスレーの綱領を捉え直すための手法を提示する。それは本書の第二部と第三部につけられている題に象徴されているように、「ウェスレーの思考の知的根幹」を探り、「新たな理論的枠組みを建て上げる」事に他ならない。さらにラウリーはその新たな理論的枠組み、ウェスレーの美徳論理の形成に伴い、「確証」（Assurance）と「完全」（Perfection）の二つの教理が再定義される必要を強調している。

ウェスレーの思想形成の上で最も中心的な存在として、ラウリーはジョン・ロックを指摘する。ジョン・ロックの英国経験論が、ウェスレーの神学の底辺を流れる思想であるとラウリーは述べる。ウェスレーとロックの経験論との関

わり合いを論じた章の結論として、「ウェスレアン認識論は、経験論、特にロックの思想に根ざし続けるべきである」(93)と彼は主張する。

経験論は一言でまとめるならば、「全ての知識の源は知覚による経験であるとする見方」(*New Dictionary*, 344)¹であろう。ラウリーはこれを踏まえて「確証」の教理に触れて、こう述べる。経験論に基づくならば「より認知的な『確証』についての説明が構築されることが可能であると私は信じるし、(それは同時に)[中略]「靈的感覚」²の類推(Analogy)の必要を排除するものである。」(Lowery, 94)

第四章では、ロックの倫理感とウェスレーの関わりとが論じられている。ロックは喜びを増加させるものを「善」とし、痛みを増し加えるものを「悪」と定義した。ウェスレーはその定義に概ね賛同した上で、ロックが提唱した三つの法「神の法(God's Law)、民法(Civil Law)、評判の法(Law of Reputation)」のうち、神の定めたまひし法のみが「すべての知的な被造物に通底する法である」³という立場を取っている。ロックは、法律は社会の倫理を保つ上で必要不可欠のものであるとし、ウェスレーもそれに賛同している。しかし、ロックとウェスレーの違いは、ウェスレーはまず第一に聖書に忠実であることを重んじたことである。「クリスチャンは、キリストに従うように民法に従うことへの明白な義務がある」とした上で、「しかしながらこの従順は盲目ではなく、聖書に

¹ David J. Atkinson et al. Eds. *New Dictionary of Christian Ethics and Pastoral Theology*. IVP, 1995

² 「靈的感覚」(Spiritual Sense) ラウリーは、この靈的感覚の類推(Analogy)は破棄されるべきであると論ずる。しかし、この靈的感覚は、彼が論じるように、ウェスレーにとっては信仰とほぼ同義のもの(Lowery, 80)であり、非常に重要な問題である。なぜラウリーがこの類推を否定するかといえば、それは靈的に経験するものは一概にその受容が主体的であって、経験論の論理と相容れないものであるからである。端的に言って、救いの経験は主体的に判断可能なものではなく、客観的に判断されるべきである、とラウリーは考えている。一瞥すればなるほど理の通った議論であるようにも見えるが、この議論はともすればウェスレーの教理を真っ向から否定するものであり、さらには救いの経験の主体的／個人的な経験またその可能性を否定するものであるようにも読めてしまう。この点に関してはさらなる検討が必要であるように思われる。

³ ウェスレー説教96「両親への従順について」より。ラウリーにより引用。

逆らうように導かれるものでもない」とウェスレーは述べている、とラウリーは指摘する (Lowery, 100)。そして、「法への従順は真実の自由と幸福へと導くものである」ともウェスレーは述べている (106)。

ウェスレーにとって、聖書は法を超越する唯一の存在であり、聖書こそが「唯一の倫理規範」(110)である。それゆえその法律が聖書に反しない限り、ウェスレーは遵法精神を貫いた。「しかしながら、ウェスレーは、聖書は、他所のどこでも得ることのできない倫理的真理を供給していると信じていた、」(110-111)とラウリーは論じる。そういった意味でも、ウェスレーにとって聖書は「第一の書」である。それゆえに、良心について論じるときも、ウェスレーにとって、聖書は良心を教育するうえで最良の書であり、第一の書なのである。「ウェスレーの考えでは、倫理的教育は聖書から始まる」とラウリーも述べる所以である (119)。

ラウリーのこれまでの主張を完結にまとめるなら、本人が第五章の冒頭で述べる通り、「ウェスレーの『確証』と『完全』の教理は知的に発展させられるべきである」というものである (122)。さらに言うならば、ロックの経験論に即した、知覚的で、客観的に判断可能な、知識主義によって論じられるべきであるということなのだろう。

完全論を発展させる上で、トマス・ア・ケンピス、ウィリアム・ロー、さらにはジェレミー・テイラーなどの、初期ウェスレーにおける影響が指摘されている。これらの先人たち (同時代の人間も含まれるが) は、「キリスト者の完全には動機の純粹さ、キリストのみ姿に倣うこと、神そして他者への愛が含まれると教え」(131)、そして、アレキサンドリアのクレメントが、知覚論的な完全論へのアプローチに於いてはウェスレーに多大な影響を及ぼしていると、ラウリーは指摘する。クレメントが「知識それ自身が最大の完全なる善であると認識していた」(148) 故である。

それゆえ、ウェスレーは、賛同しない部分が少ないわけではなかったが⁴、神秘主義を可能な限り排除し、さらには「静寂主義の完全論へのアプローチか

⁴ ラウリーが論じるように、ウェスレーと神秘主義は、個人の瞑想 (デヴオーション)、特に祈祷の必要性については一致を見ている。

ら遠ざかった」(151)とラウリーは述べる。

この姿勢、つまりは知覚論的な手法は、感情を論ずるときにも一貫されているとラウリーは述べる。ウェスレーは、外側からの恵みの手段、特に教育こそが、感情形成のうえで必要不可欠であると考えていたし、(179)「神の知識無しに、私たちが神を愛することは不可能であるとの意見を持っている」とも指摘している。(182-183) その流れで、ウェスレーを論じる上で重要な項目である愛について論じるときも、感情は、知覚的に根ざしたものである、という論理を貫き通す。

この流れを踏まえた上で、ラウリーは、本書の核心であるとも言える、カントとウェスレーの関わりについて論じ始める。曰く、「カントの倫理的思考は、ウェスレーの理論的枠組みに採用され、包含されうるいくつかの概念を供給するものである。」(237)、そして、ウェスレーの思想的枠組みが尊重されうる限り、カントの思考は採用されるべきであるともラウリーは述べる。このように断り書き付きなのは、「カントの宗教観はウェスレーのそれとは著しく異なるものであった」(238)からという理由がある。カントの倫理観もウェスレーのそれとは異なるものだった。ラウリーがまとめるように、「カントは、倫理観は神の概念とは別の、独立したものである」(240)と考えていたし、カントの完全論もやはりウェスレーのそれとは違い、理想的なキリスト像を心の中にただ持てば良い、というようなものだった。カントとウェスレーの倫理観の違いは重要である。「カントにとって、倫理的原動力は、『義務』そのものに対する尊敬から生ずるものであったのに対し、ウェスレーにとってそれは神への愛と人への愛から発生するものであった」(274)。このように、カントとウェスレーは宗教観も違い、倫理観もこのように、ずいぶんと相容れない部分が多い。それでも、ラウリーは、カントがウェスレーの完全論を新たに論じる上での欠かせない素材であると論じる。時代の相違の故に「ウェスレーがカントの著作を手にすることはなかったが、(もしそれが可能であったのなら) ウェスレーがカントを有用な資料としていただろうという想像を禁じ得ない」(243)とラウリーは想像さえもする。

ラウリーは、ウェスレーの教理の伝統に於ける罪の定義は拡大されて、「義務の無視／不履行」も含有するように再定義されるべきであると述べる。なぜ

ならば、ウェスレーの罪の定義「意識的な法の違反」にカントの（義務に関する）倫理概念が付加されることによって、ウェスレーの完全論がより堅固なものとして説明されうるからである。ウェスレーの完全論は、内なるきよめ、そして外なるきよめを目指すものである。そして、それは主観的であり、客観的でもある。そこに、カントの倫理的完全を結び合わせることによって、さらなる論理的発展ができる（265）とラウリーは論じている。そして、カントの提唱した原理原則（maxims）を人間の倫理的行動の基盤として捉えることが、新たな試行的枠組を形成する上で、好ましいとも述べる。

これらを踏まえた上で、ラウリーは「確証」と「完全」の教理についてさらに論ずる。「簡潔に言えば、『確証』は共に経験論的で心理学的な宗教信仰と自己知識に基づくことになり、『完全論』はより目的論の文脈に根ざした形で理解されるようになる」（271）。

本書で繰り返されているように、ラウリーは「確証」の教理は、その根幹が知覚的であるべきで、「ウェスレーの『確証』の理解は、罪が赦されたという信念と、その人の内に重要な倫理的進展がみられ、これからも継続的にあるだろうという程にその人の生涯が変えられたという確かな信念との、いずれをも包含するものでなければいけない」（276）と述べている。この二番目の点は、本書中で論じられている救いの教理とも結びつくものである。客観的に判断可能な行いによって、ある程度個人の救いが判断されるべきであるというのはガラテヤ書を引用するまでもなく的を得ている論理ではある。「私たちは信仰のみによって救われているものの、正当な信仰は悔い改め、愛、そして良い行いを生み出すものである」（278）とラウリーも補足する通りである。

もうひとつの教理である「完全」について、ラウリーはさきほど述べた通り、この教理は目的論の文脈に置かれるべきであると考えている。はじめに述べた通り、彼は漸的聖化を主張する側にいるゆえに、必然的にこのように述べざるをえないのであり、また必然的に存在論的な瞬時的聖化を拒絶しているのである。

ここで課題として提示できうることは、完全論ひいては全的聖化の概念についてである。もちろん、漸的聖化の立場をとっているラウリーにとって、存在論的な観点からの瞬時的全的聖化（彼が批判するところの、伝統的なきよめ派

の教えるところの、「全的聖化」の教理である）は相容れない要素に満ちているに違いないが、逆に漸的聖化の場合に、確かに靈的成長の側面は強調できるかもしれないが、聖靈の業による瞬時的変化の可能性を否定している段階で、彼の論理を受け入れることは不可能である。

さて、ラウリーはこう述べる。「ウェスレーは、『完全』は意図的な罪に対する勝利を包含すると主張する。もし罪の定義が義務の概念にまで拡大されるなら、『完全』は義務の遂行をも含むものである。しかし、(訳者註・従来の)ウェスレアンによる『完全』についての説明は主に「気質」(affection)に焦点を絞るので、『完全』は心の全てを傾けた神への愛、他者への愛、そして意図の純粹さをも必然的に伴う」(281)。つまり、ラウリーは本書に於いて、カントの哲学に基づいた罪の新たな定義に基づいて、ウェスレーの「完全論」の新たな定義を試みているのである。そして、その新たな定義、つまりキリスト者の完全は義務の遂行までをも包含するものであるとするとときに、ラウリーは「**完全な意味で『完全』に到達することが可能であると信じることは間違っている**」と述べる。つまり、彼が提唱する新たな罪と完全の教理によるならば、この世に於ける「全的聖化」の可能性は無い、と述べるわけである。それを補足するように、ラウリーは「ウェスレーは『完全』は段階に応じて到達されるものであると認識していた」(300)と述べている。そして、ラウリーは、伝統の中で完全が「(一時的)事象」としてか、それとも「過程」として扱われるべきかという問を発し、漸的聖化の立場に立つ彼は当然それは「過程」として扱われるべきであると述べる。もうすこし具体的に述べるならば、『完全』は特定の目的一達成の程度一を持つ過程である」とラウリーは述べていると言える。

ここで彼はウェスレーの説教 98 番「信仰について」からの引用をする。そこには、「あなた達が完全な愛に到達するとき、神があなた達の心に割礼を授け、あなたが心を尽くし靈を尽くして神を愛することが可能にされるとき、その段階に留まって憩うことを考えてはいけな

い」(qtd in 301、私訳)と書いてある。ラウリーはこれを解釈するときに、例えば愛に於いてある程度に達したとしても、それ以上の成長の可能性はまだある、という理由を持って、「完全」の「目的」を、「末端／終末」(termini)として解釈することは不可能であるという持論を展開する。(しかし、この説教は、どちらにも読めてしまう。説教中で、ウ

エスレーはキリスト者の「完全」のこの世界に於ける達成の可能性を説いているように評者は思わざるをえない。))

それを踏まえて、彼は「ウェスレアン倫理は、『完全』を特定のさまざまな部分に於いて達成できる目的と捉えるのではなくて、私たちが絶え間なく切望する、より広範な目的として考えるべきである」(308)と述べる。

先程ラウリーは、この世に於いて全き完全に至ることは不可能であるという発言をしている。しかし、本書の結びに於いてもう一度完全について論じるときに、ラウリーはこう述べている。「『完全は』達成可能な目的として奨励されるべきである」(310)。換言すれば、私たちは全き意味で完全に至ることはないが、個人差こそあれ、「完全」を、達成することのできるものとして考えるべきだ、ということなのだろうか。ウェスレーの説いた「キリスト者の完全」とは、その信仰成長の中で、倫理的にも熟成し、意図的な罪から解放された、(倫理的)義務を遂行するクリスチャンのことであろうか

終りに短く私見を述べたい。俯瞰してきたように、ウェスレーの神学にはロックの英国経験論に端を発する様々な思想的影響が強く、私たちは知識主義を排除することなくそれらの歴史的背景を知ることが肝要で、さらにカント的倫理観をその教理に継ぎ足すことによって、より良い「確証」と「完全」の教理に基づいたウェスレアン倫理の為の新たな思考的枠組を構築する、というのが本書の要旨であるように思う。確かに一読に値する議論ではある。評者がウェスレアンの伝統に於ける倫理観というものについて熟考させられたのも事実である。だが、しかし、なるほどラウリーが指摘するように、ウェスレー教理の歴史的背景がメソジスト運動やホーリネス運動の影響下にある教会であっても語られることは少ないかもしれない。だからといって、歴史背景的認識がないからと言って、ウェスレーの教理が全く理解出来ないわけではないだろう。ウェスレーの教理は、様々な歴史的背景の影響を受けてはいるが、それ以上に、彼の「第一の書」であった聖書から抽出されたものであることは周知の事実である。それ故たとえ英国経験論を知らずとも、私たちは救いの確証について領きを得るのである。歴史的背景並びに教理的背景に注意を喚起されるあまり、木を見て森を見ず、という迷宮状態に、本書は入り込んでいるような印象を受ける。さらに悲しき事に、本書中で聖句への言及はほとんどされていない。ウ

書評 Salvaging Wesley's Agenda

エスレアンであるならば、例えそれが反知識主義的に映ろうとも、その第一次資料的根拠を聖書に求めることは不文律であるような気がするのだが（少なくともウェスレーはそうであったと言えよう）、本書にはその兆候はない。教派を問わず、聖書に基づいた倫理観というものは大事である。しかし、本書を読む限りでは、哲学的営為の中からしかエスレアンの倫理観が醸成されないような印象を筆者は受けた。本書から学ぶことは沢山あるが、同時に、様々な意味で本末転倒になりかかっているという印象を受けたのも、評者の隠さぬ感想である。

(米国 Wesley Biblical Seminary, Master of Divinity 在籍中)